

手をつなごう2008

平成20年11月25日
岡山県立東備養護学校
支援部だよりNO. 20

コーディネーター お薦めの本④

(医学書院の「ケアをひらく」シリーズ) よりもう一冊をご紹介します。



コーディネーターUのお薦め
「死と身体 コミュニケーションの磁場」
内田 樹 著
(医学書院) 2100円



思わずドッキリさせられる題名ですが、この題名のせいでこの本が手に取られずにいるとしたら残念というほかありません。副題に見られるように、この本で述べられているのはあくまでも「コミュニケーション」論です。私たちは子どもたちのよりよいコミュニケーションを目指して日々アイディアを探究していますが、その「コミュニケーション自体を成立させ得る足場」があるのではないかと、そしてそれは何かということについて語られています。

身体は正直で、脳が気がつく前に身体が気が付いている、しかし現代社会での喧騒の中では、「感じる」能力を鈍化させ「頭」で考える事で何とか状況に適応し、自分を守ろうとしている、でも実はそれは非常に危険な状態であると内田先生は言っておられます。また、家族関係の中で起きる「ダブルバインド」の問題。口では母親から「愛している」と言われながら、いざ近寄ると母親に身をかわされ混乱してしまう息子の事例は、現代の虐待問題にも通じる、非常に興味深い話です。

この本を読むとコミュニケーションとは<ことば>の外にあるものであり、それを敏感に感じ取ることこそが臨床の基本の力なのだと感じます。コミュニケーションは自分の感情と、相手の感情をとともに感じられるという身体性があってはじめて成立するものだという事。知識と技法はあっても、感情に対するセンサーがさびてしまっていると、援助関係が成立しないということをこの本は教えてくれます。

文中に他の著作からの引用も多く、楽しみながらコミュニケーションの持つ深さについて考えさせてくれます。



